

平成 27 年 12 月 8 日

学位請求論文（課程博士）審査報告

学位請求論文： 神林長平論：コミュニケーションと意識の表現

学位請求者： 文学研究科博士課程日本語日本文学専攻

白鳥 克弥

審査委員

主査 文学部教授 高橋 龍夫 ㊞

副査 文学部教授 板坂 則子 ㊞

副査 文学部准教授 高橋 雄一 ㊞

審査報告

本論は、SF作家の神林長平の初期から最新作までの代表作を分析対象としながら、神林の作品における特質とその思想性について体系的に捉えようとした研究論文である。神林長平については、現代日本のSF作家の代表的存在として1980年代から現在に至るまで、常に精力的にSF作品を発表し、後進のSF作家たちの模範としても存在感を示してきた。しかし、文学研究において、神林長平を本格的に論じたものは皆無であり、その功績や同時代的意義を文学研究の立場から適切に評価する視座が求められてきた。白鳥克弥君の本論は、それに日本で初めて応えようとした画期的な研究といえる。特に、SF作家というジャンルや枠組みにとらわれることなく、神林長平の長年にわたる創作における問題意識を抽出することに力点をおいて、作品内に描かれる機械や超越的存在、ネットワーク等と人間とのコミュニケーションの諸相に着目し、そこから人間の能力として備わっている意識と表現との関係性を神林作品ではどのように描きそれをどう評価するかについて

論じた点は、文学研究の手法を周到に用いて水準を高く維持しており評価に値する。

具体的には、基礎的手続きとして、従来の批評や研究では未着手だった諸作品を精読した上でテキスト論の立場から作品内の時間構造や人物関係、描写等を丁寧に分析するところから始めている。とりわけ、作品内で明確な因果関係が見えにくい機械を介在とした言語と人間意識との関係性や錯綜した時空の中で行動する各登場人物の関係性を独力で整理し、構成図を作成することによって的確に捉え構造化した功績は、賞賛に値する。また、諸作品を体系的に分析する中で、「登場人物の自律性」という概念にたどり着き、このモチーフを細心の注意を払いながら創作歴について時系列で検証した上で、作家の自己探求的な世界観の変遷と現時点での創作実践上の達成点とを論じることに成功しており、神林長平を体系的に論じる糸口を発見したことは本研究の最大の収穫である。

総じて、表作とされる「雪風」シリーズ三作や「自・我・像」「いま集合的無意識を、」「誰の息子でもない」等のインターネットをモチーフとした一連の作品、そして最新長編作品である「ぼくらは都市を愛していた」といった諸作品の詳細な分析やそこから導かれる作家の思想の解明に力点を置いた本論は、神林長平研究の礎となることは明白であり、今後、本論が神林長平研究や現代日本SF研究の中で引用され評価・批判されていくことが見込まれ、その意味でも貴重な研究論文であることは間違いない。

その一方で、現代日本を代表するSF作家を論じるに当たって、20世紀の国内外のSF作家の作品や映画等の影響についての目配りがなく、神林長平の作風の特質と存在意義を同時代的な視点から相対化して論じる視点が欠けている点は今後の課題として残った。また、本論では分析対象作品が限られており、今後は多作である神林における他の諸作品も取り上げて徹底したテキスト論を試み、そこから抽出される思想や特質といった作家の位相を導入しつつ論者の観点によって批評する手法が有効であり、神林長平のSF作家としての可能性と限界とを客観的に論じることが要請されてくる点も指摘しておきたい。

白鳥克哉君は、国内外のSF作家の作品に最大の関心を抱きつつも、文学理論や現代思想、精神分析学についても精通しており、また日本近現代文学の作品を分析し批評する能力も十分に兼ね備えている。そういった総合的な知識と能力とを駆使しながら神林長平研究に着手してきた。本論はそうした点を鑑みても、今後、文学研究の領域において広く活躍することが期待される研究成果である。

以上のことより、審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。